

(51)Int.Cl.

F I

G 0 1 N 21/64 (2006.01)

G 0 1 N 21/64

B

H 0 1 L 21/66 (2006.01)

H 0 1 L 21/66

L

請求項の数2 (全10頁)

(21)出願番号 特願2001-91521(P2001-91521)  
 (22)出願日 平成13年3月28日(2001.3.28)  
 (65)公開番号 特開2002-286640(P2002-286640A)  
 (43)公開日 平成14年10月3日(2002.10.3)  
 審査請求日 平成17年2月16日(2005.2.16)

(73)特許権者 503360115  
 独立行政法人科学技術振興機構  
 埼玉県川口市本町4丁目1番8号  
 (74)代理人 100089635  
 弁理士 清水 守  
 (72)発明者 鎌田 憲彦  
 埼玉県浦和市別所3-19-14-101

審査官 横井 亜矢子

(56)参考文献 特開昭60-207346(JP,A)  
 特開2001-007173(JP,A)  
 )  
 特開2000-304699(JP,A)  
 )

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 2波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法及びその装置

(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】

禁制帯エネルギー幅以上の励起光、禁制帯エネルギー幅以下の励起光を用いる2波長励起フォトルミネッセンスにおいて、前記禁制帯エネルギー幅以上の励起光または禁制帯エネルギー幅以下の励起光を試料にパルス照射し、前記試料固有の発光強度の時間依存性から、禁制帯内の非発光再結合準位の再結合パラメータを導出することを特徴とする2波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法。

【請求項2】

(a) 禁制帯エネルギー幅以上の励起光または禁制帯エネルギー幅以下の励起光をパルス照射する手段と、

(b) 該パルス照射に基づいた時分解応答の時定数を求める手段と、

(c) 該時定数に基づき非発光再結合準位を定めるパラメータを測定する手段とを具備することを特徴とする2波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、発光材料、発光デバイスの発光効率改善のために不可欠な、非発光再結合準位の定量測定方法及びその装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

従来、このような分野の技術としては、以下に開示されるものがあった。

〔 1 〕 K . H o s h i n o e t a l . , J . L u m i n . 7 9 ( 1 9 9 8 ) 3 9 . , J p n . J . A p p l . P h y s . 3 7 ( 1 9 9 8 ) 3 2 1 0 .

〔 2 〕 P r o c . I n t . W o r k s h o p o n N i t r i d e S e m i c o n d . , I P A P C o n f . S e r i e s 1 p p . 5 4 4 - 5 4 7 , 2 0 0 0 .

半導体等の発光材料や発光デバイス試料に禁制帯エネルギー幅以上の励起 ( A b o v e - G a p E x c i t a t i o n , A G E ) 光を照射すると、試料固有の発光 ( フォトルミネッセンス、 P L ) を生じる。この P L 強度  $I_A$  は、発光再結合率と禁制帯内準位を介した非発光再結合率との競合の結果定まっている。

【 0 0 0 3 】

次に、この状態で禁制帯エネルギー幅以下の励起 ( B e l o w - G a p E x c i t a t i o n , B G E ) 光を同時照射すると、この B G E 光のエネルギーが禁制帯内準位の一つと一致する場合、その準位のみが選択的に励起されることによって、試料内の非発光再結合率が変化し、そのため先の発光再結合率、非発光再結合率のバランスがずれて P L 強度も  $I_A$  から  $I_{A+B}$  に変化する。従来はこの相対 P L 強度  $I_{A+B} / I_A$  及びその A G E 強度依存性、 B G E 強度依存性の測定結果から、禁制帯内準位の非発光再結合パラメータを導出するようにしていた。

【 0 0 0 4 】

【 発明が解決しようとする課題 】

しかしながら、上記した従来の方法では、データ数が足りないため、1 準位につき 4 個ある非発光再結合パラメータを一義的に定めることは困難であった。

【 0 0 0 5 】

また、従来定常値のみを用いた非発光再結合パラメータの決定方法では、相対 P L 強度  $I_{A+B} / I_A$  の A G E 及び B G E 強度依存性の測定結果と計算結果とをフィッティングさせることにより、パラメータを定めていた。このため算出精度が低く、またフィッティングの順番により結果が異なる危険性があった。

【 0 0 0 6 】

本発明は、上記問題点を解決するために、より簡便に、かつ精度よく非発光再結合パラメータの決定を可能とする 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法を提供することを目的とする。

【 0 0 0 7 】

【 課題を解決するための手段 】

本発明は、上記目的を達成するために、

〔 1 〕 禁制帯エネルギー幅以上の励起 ( A b o v e - G a p E x c i t a t i o n , A G E ) 光、禁制帯エネルギー幅以下の励起 ( B e l o w - G a p E x c i t a t i o n , B G E ) 光を用いる 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法において、前記 A G E または前記 B G E 光をパルス照射し、試料固有の発光 ( フォトルミネッセンス、 P L ) 強度の時間依存性から、禁制帯内の非発光再結合準位 ( 禁制帯内準位 ) の再結合パラメータを導出することを特徴とする。

【 0 0 0 8 】

〔 2 〕 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定装置において、禁制帯エネルギー幅以上の励起光または禁制帯エネルギー幅以下の励起光をパルス照射する手段と、このパルス照射に基づいた時分解応答の時定数を求める手段と、この時定数に基づき非発光再結合準位を定めるパラメータを測定する手段とを具備することを特徴とする。

【 0 0 0 9 】

本発明では、従来は定常光 ( 時間的に強度の変化しない光 ) であった A G E または B G E 光をパルス光とする。この時の P L 強度の  $I_A$  から  $I_{A+B}$  間、または  $I_B$  から  $I_{A+B}$  間の時間変化を測定、記録する。この P L 時間応答波形には、定常値 ( 例えば  $I_A$  及び  $I_{A+B}$  ) に加え、それらの間を結ぶ時定数 が新たに加わっている。この時定数の値を利用すれば、当該準位の非発光再結合率を容易に算出できることが実証された。

10

20

30

40

50

## 【 0 0 1 0 】

## 【 発明の実施の形態 】

以下、本発明の実施の形態について詳細に説明する。

## 【 0 0 1 1 】

図 1 は本発明にかかる 2 波長励起の模式図であり、図 1 ( a ) は禁制帯内に 1 準位がある最も単純な場合 ( 1 準位モデル ) である。この場合、B G E 光照射により P L 強度は増加する。

## 【 0 0 1 2 】

B G E 光照射により P L 強度が低下する場合は、図 1 ( b ) に示す 2 準位モデルで扱うことが可能である。伝導帯電子密度  $n$ 、価電子帯正孔密度  $p$ 、準位 1 及び 2 の電子占有関数  $f_{t1}$ 、 $f_{t2}$  に対する S R H 統計に基づくレート方程式及び電荷の中性条件は、最も基本的な項を含めると以下ようになる。

## 【 0 0 1 3 】

$$d n / d t = G_1 - B n p - C_{n1} n N_{t1} (1 - f_{t1}) \quad \dots (1)$$

$$d p / d t = G_1 - B n p - C_{p1} N_{t1} f_{t1} p - C_{p2} N_{t2} f_{t2} p \quad \dots (2)$$

$$d f_{t1} / d t = C_{n1} n (1 - f_{t1}) - C_{p1} f_{t1} p - G_2 f_{t1} N_{t2} (1 - f_{t2}) \quad \dots (3)$$

$$d f_{t2} / d t = G_2 N_{t1} f_{t1} (1 - f_{t2}) - C_{p2} f_{t2} p \quad \dots (4)$$

$$n + N_{t1} f_{t1} + N_{t2} f_{t2} = p + N_D \quad \dots (5)$$

ここで  $G_1$  は A G E 光の励起密度、 $G_2$  は深い準位間の結合の強さ等も含めた B G E 光の励起強度、 $N_{t1}$ 、 $N_{t2}$  はそれぞれ準位 1、準位 2 の濃度、 $C_{p1}$ 、 $C_{p2}$  は正孔捕獲率、 $C_{n1}$  は準位 1 の電子捕獲率であり、 $N_D$  はドナー不純物密度である。B は発光再結合係数と呼ばれ、電子及び正孔のバンド内分布とバンド間双極子遷移行列要素で定まる。

## 【 0 0 1 4 】

上記式で各変数に  $\bar{\quad}$  をつけたのは、B G E 光照射時の値であることを示すためである。

$G_2 = 0$  ( A G E 光照射のみ ) のときは  $f_{t2} = 0$  であるから、

$$d \bar{n} / d t = G_1 - B \bar{n} \bar{p} - C_{n1} \bar{n} N_{t1} (1 - \bar{f}_{t1}) \quad \dots (6)$$

$$d \bar{p} / d t = G_1 - B \bar{n} \bar{p} - C_{p1} N_{t1} \bar{f}_{t1} \bar{p} \quad \dots (7)$$

$$d \bar{f}_{t1} / d t = C_{n1} \bar{n} (1 - \bar{f}_{t1}) - C_{p1} \bar{f}_{t1} \bar{p} \quad \dots (8)$$

$$\bar{n} + N_{t1} \bar{f}_{t1} = \bar{p} + N_D \quad \dots (9)$$

となり、一般に式 ( 1 ) から式 ( 5 ) までの変数  $n$ 、 $p$ 、 $f_{t1}$ 、 $f_{t2}$  ( B G E 光照射時 ) と、式 ( 6 ) から式 ( 9 ) までの変数  $\bar{n}$ 、 $\bar{p}$ 、 $\bar{f}_{t1}$ 、 $\bar{f}_{t2} (= 0)$  ( B G E 光非照射時 ) とは値が異なる。

## 【 0 0 1 5 】

図 2 は本発明の実施例を示す時分解 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定装置 ( システム ) の構成図である。

## 【 0 0 1 6 】

この図において、1 は A G E 光源、2 は B G E 光源、3 は試料、4 は分光器、5 は光電子増倍管、6 はデジタルオシロスコープ、7 はボックスカー積分器、8 はコンピュータである。

## 【 0 0 1 7 】

一例として、試料 3 として青色発光半導体である G a N を評価する場合、A G E 光源 1 としては重水素ランプに干渉フィルターを組み合わせたもの、B G E 光源 2 としては波長可変の N d : Y A G レーザ励起光パラメトリック発振器 ( O P O )、色素レーザー、T i : サファイアレーザー等のパルス発振レーザー類を用いる。試料 3 からの P L は分光器 4 で分光後、光電子増倍管 5 で受光し、その時間応答波形がデジタルオシロスコープ 6、またはボックスカー積分器 7 等を通してコンピュータ 8 に記録される。また、コンピュータ 8 は A G E 光源 1 または B G E 光源 2 に接続されて、パルス光を得ることができるようになっている。

10

20

30

40

50

## 【 0 0 1 8 】

このように本発明では、従来は、定常光（時間的に強度の変化しない光）であった A G E 光または B G E 光をパルス光とする。この時の P L 強度の  $I_A$  から  $I_{A+B}$  間、または  $I_B$  から  $I_{A+B}$  間の時間変化を測定し、コンピュータ 8 に記録する。この P L 時間応答波形には、定常値（例えば  $I_A$  及び  $I_{A+B}$ ）に加え、それらの間を結ぶ時定数  $\tau$  が新たに加わっている。この時定数  $\tau$  の値を利用すれば、当該準位の非発光再結合率を容易に算出できることが実証された。

## 【 0 0 1 9 】

以下、その時分解 2 波長励起フォトルミネッセンスの説明を順次模式図を用いて説明する。

10

## 【 0 0 2 0 】

図 3 は本発明にかかる 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の働きを、水の流りに例えて説明する図である。

## 【 0 0 2 1 】

まず、1 準位モデル〔図 1 ( a )〕に対応する図 3 ( a ) では、1 0 1 は伝導帯 n のタンク、1 0 2 は価電子帯 p のタンク、1 0 3 は非発光再結合準位のタンク、1 0 4 は伝導帯 n のタンク 1 0 1 から価電子帯 p のタンク 1 0 2 への水（電子）が流れる管（発光再結合）、1 0 5 は伝導帯 n のタンク 1 0 1 から非発光再結合準位のタンク 1 0 3 への水（電子）が流れる管（非発光再結合）（管の太さ  $C_n$ ）、1 0 6 は非発光再結合準位のタンク 1 0 3 から価電子帯 p のタンク 1 0 2 へ水（電子）が流れる管（非発光再結合）（管の太さ  $C_p$ 、 $C_n$ ）、1 0 7 は価電子帯 p のタンク 1 0 2 から伝導帯 n のタンク 1 0 1 へ水（電子）をくみ上げるポンプ、1 0 8 は価電子帯 p のタンク 1 0 2 から非発光再結合準位のタンク 1 0 3 へ水（電子）をくみ上げるポンプである。

20

## 【 0 0 2 2 】

そこで、通常の P L の場合は、

( 1 ) ポンプ 1 0 7 で水（電子）を伝導帯 n のタンク 1 0 1 へくみ上げる。

## 【 0 0 2 3 】

( 2 ) 伝導帯 n のタンク 1 0 1 内の水（電子）は発光再結合の管 1 0 4、非発光再結合の管 1 0 5、1 0 6 を通って価電子帯 p のタンク 1 0 2 内へ流れる。

## 【 0 0 2 4 】

( 3 ) この時内部量子効率  $\eta_{int}$  は、

$$\eta_{int} = \text{発光再結合（流量）} / \left[ \text{発光再結合} + \text{非発光再結合（流量）} \right]$$

で定まる。

30

## 【 0 0 2 5 】

( 4 ) 非発光再結合準位のタンク 1 0 3 は、水位がほぼ満杯（ $f \approx 1$ ）に近い。管 1 0 6 を通して水（電子）が価電子帯 p のタンク 1 0 2 へ流れると、非発光再結合準位のタンク 1 0 3 の空きを直ちに伝導帯 n のタンク 1 0 1 の水（電子）が管 1 0 5 を通じてつめる。すなわち、非発光再結合準位の流量は管 1 0 5、1 0 6 の太さ  $C_n$ 、 $C_p$  のうち小さい方（この場合は  $C_p$ ）で律速される。

## 【 0 0 2 6 】

そこで、図 3 ( a ) と図 4 を用いてパルス応答について説明する。A G E 光のみが照射される時は、

( 1 ) まず、図 4 ( a ) に示すように、 $t = 0$  から  $t$  間だけポンプ 1 0 7 が駆動される。

## 【 0 0 2 7 】

( 2 ) 上述したように、伝導帯 n の水（電子）は、発光再結合の管 1 0 4、非発光再結合の管 1 0 5、1 0 6 を通じて価電子帯 p へ流れる。

## 【 0 0 2 8 】

( 3 ) 伝導帯 n の水位が低下するにつれて流れは少なくなり、図 4 ( b ) に示すように、発光は  $e \times p$  (  $\tau$  ) で減衰する。

40

50

## 【 0 0 2 9 】

( 4 ) この時定数  $\tau$  は発光再結合、非発光再結合の時間応答双方で ( 特に早い方 ) で定まる。つまり、 $1/\tau = (1/\tau_r) + (1/\tau_{nr})$

次に、2 波長励起 PL の場合、

( 1 ) 通常の PL の場合に加え、ポンプ 1 0 8 ( B G E ) で水 ( 電子 ) をタンク ( 非発光再結合準位 ) 1 0 3 にくみ上げる。この時、価電子帯 p のタンク 1 0 2 の水 ( 電子 ) は減る ( 正孔 p は増える ) ので、PL 強度  $B_{np}$  は増加する ( B G E 効果 ) 。

## 【 0 0 3 0 】

( 2 ) タンク 1 0 3 は満杯 (  $f_{t1} = 1$  ) となり、さらにポンプ 1 0 8 のパワーを増やしても水 ( 電子 ) はタンク 1 0 3 には入らない ( B G E 効果の飽和現象 ) 。この時  $f_{t1} = 1$  であることがわかる。

## 【 0 0 3 1 】

図 5 を参照しながらパルス応答について説明する。

## 【 0 0 3 2 】

( 1 ) まず、図 5 ( b ) に示すように、 $t = 0$  でポンプ 1 0 8 を止める。

## 【 0 0 3 3 】

( 2 ) 次に、図 3 ( a ) で、ポンプ 1 0 8 により A G E 照射のみの平衡水位以上に蓄えられていたタンク 1 0 3 の水 ( 電子 ) は、管 1 0 6 を通って徐々に価電子帯 p のタンク 1 0 2 に戻る。図 5 ( c ) に示すように価電子帯の水はその分の遅れを伴って増加する。

## 【 0 0 3 4 】

( 3 ) すると、図 5 ( c ) 及び図 5 ( d ) に示すように、価電子帯 p のタンク 1 0 2 の水 ( 電子 ) の空きが正孔 p だから、正孔 p は徐々に減り、それを反映して PL 強度  $B_{np}$  も徐々に減少する。この時の応答時定数  $\tau_2$  は  $C_p$  で定まるので、時定数  $\tau_2$  から  $C_p$  を定めることができる。

## 【 0 0 3 5 】

B G E 光照射により PL 強度が低下する場合 [ 図 1 ( b ) のモデル ] の説明図 [ 図 3 ( b ) ] では、先の図 3 ( a ) の説明 1 0 3、1 0 5、1 0 6 が準位 1 の量となり、その他に準位 2 のタンク 1 0 9、そこから価電子帯のタンク 1 0 2 への管 ( 非発光再結合 ) 1 1 0、および準位 1 のタンク 1 0 3 から準位 2 のタンク 1 0 9 へ水 ( 電子 ) をくみ上げる B G E のポンプ 1 1 1 が加わっている。

## 【 0 0 3 6 】

通常の PL では、ポンプ 1 0 7 で伝導帯のタンク 1 0 1 にくみ上げられた水が、図 3 ( a ) と同様に発光再結合の管 1 0 4、非発光再結合の管 1 0 5、1 0 6 を通って価電子帯のタンク 1 0 2 に戻る。B G E 光照射が無い場合ポンプ 1 1 1 は作動せず、準位 2 のタンク 1 0 9 は空である。

## 【 0 0 3 7 】

B G E 光照射を行うと、ポンプ 1 1 1 が作動して準位 1 のタンク 1 0 3 から準位 2 のタンク 1 0 9 へ水 ( 電子 ) をくみ上げる。すると準位 2 のタンク 1 0 9 から価電子帯のタンク 1 0 2 へ、新たに非発光再結合の管 1 1 0 を通って水が流れる。また準位 1 のタンク 1 0 3 の水位が減るので、伝導帯のタンク 1 0 1 から準位 1 のタンク 1 0 3 への水の流れが増加する。これらによって価電子帯のタンク 1 0 2 の水位は増加 ( 正孔は減少 ) し、伝導帯のタンク 1 0 1 の水位は減少するので、PL 強度は低下する。ポンプ 1 1 1 のパワーを増やすと準位 2 のタンク 1 0 9 の水位は増すが、タンク 1 0 9 が満杯 (  $f_{t2}$  がほぼ 1 ) となると、さらにポンプ 1 1 1 のパワーを増やしても水はタンク 1 0 9 には入らない ( B G E 効果の飽和現象 ) 。

## 【 0 0 3 8 】

このモデルでの A G E 光のみ照射時のパルス応答に関しては、準位 2 は無関係なので先の図 3 ( a ) での説明と同じである。すなわち図 4 ( a ) の励起パルスに対して、PL 強度は図 4 ( b ) に示すように、時定数  $\tau$  で減衰する。

10

20

30

40

50

## 【 0 0 3 9 】

次に、図 3 ( b ) と図 5 を参照しながら、2 波長励起でのパルス応答について説明する。

## 【 0 0 4 0 】

( 1 ) まず、図 5 ( b ) に示すように、 $t = 0$  でポンプ 1 1 1 を止める。

## 【 0 0 4 1 】

( 2 ) 次に、図 3 ( b ) でタンク 1 0 9 から価電子帯のタンク 1 0 2 に戻っていた水量は、タンク 1 0 9 への供給が止まったため徐々に減少し、最終的には 0 となる。そのため図 5 ( e ) に示すように、価電子帯のタンク 1 0 2 の水位は管 1 1 0 を通るための時間遅れ〔図 4 ( b ) の  $\tau_2$  とは異なる時定数  $\tau_2$ 〕を伴って減少（正孔密度は増加）し、B G E 10  
光照射がない場合の定常値に戻る。

## 【 0 0 4 2 】

( 3 ) すると、図 5 ( e ) および図 5 ( f ) に示すように、価電子帯の正孔密度は増加するので P L 強度は増大し、その時定数から準位 2 の性質（管 1 1 0 の太さ）を観測することができる。

## 【 0 0 4 3 】

最後に、本発明の時間応答を含めた方法について図 6 を参照しながら説明する。

## 【 0 0 4 4 】

図 6 は本発明の実施例を示す時分解 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法〔図 1 ( b ) の 2 準位モデルの場合〕の説明図である。 20

## 【 0 0 4 5 】

2 0 1 は通常の P L 部、2 0 2 は 2 波長励起 P L 部、2 0 3 は 2 波長励起 P L の時分解応答部（最も単純な場合、 $\tau_2 = 1 / N_i C_p$ ）、2 0 4 は時定数  $\tau_2$  を用いた計算部、2 0 5 はフィッティング部である。

## 【 0 0 4 6 】

このように構成したので、新たに時定数  $\tau_2$  という非発光再結合率自体を表す測定量を用いるため、フィッティングは最終段階の 1 回で済み、2 回のフィッティングによるこの不確実性がなくなった。つまり、非発光再結合準位の定めるべきパラメータの 1 つを直接的に測定できるため全パラメータの導出がより簡便に精度よくできる。

## 【 0 0 4 7 】

## 〔実験例〕

A G E 励起光と B E G 励起光による発光強度の変化を測定する二波長励起 P L 法により、バルク G a N のバンド近傍 P L と Y L（イエロー・ルミネッセンス）の発光における B G E 遮断後の P L 強度の回復過程を時分解測定により検討した。試料は常圧 T F - M O C V D 法によりサファイア基板上に  $2.1 \mu\text{m}$  成長した G a N である。Y L を観測すると、B G E を遮断後、図 7 の差し込み図に示すように、Y L 強度は徐々に回復し、図 7 に示すように、その回復時定数  $\tau_2$  は A G E 強度が高まるにつれ、2 8 秒から 1 秒まで短縮した。また、A G E 強度を固定し、B G E 強度を高めると、図 8 に示すように、時定数  $\tau_2$  は 1 7 秒から 3 1 秒まで延びた。

## 【 0 0 4 8 】

なお、本発明は上記実施例に限定されるものではなく、本発明の趣旨に基づいて種々の変形が可能であり、これらを本発明の範囲から排除するものではない。

## 【 0 0 4 9 】

## 【発明の効果】

以上、詳細に説明したように、従来 of 定常値のみを用いた非発光再結合パラメータの決定方法では、相対 P L 強度  $I_{A+B} / I_A$  の A G E 及び B G E 強度依存性の測定結果と計算結果とをフィッティングさせることにより、パラメータを定めていた。このため算出精度が低く、またフィッティングの順番により結果が異なる危険性があった。これに対し本発明では、新たに時定数  $\tau_2$  という非発光再結合率自体を表す測定量を用いるため、フィッティングは最終段階の 1 回で済み、この不確実性がなくなった。 50

## 【 0 0 5 0 】

本発明により、禁制帯内準位の非発光再結合パラメータが定量的に測定できれば、禁制帯内に非発光再結合率準位があるか否かはもとより、そのエネルギー、濃度、伝導帯、価電子帯との結びつきの強弱、準位の性質等がすべて明らかとなるため、それが何に基づくものであるか、( G a 空孔や C 残留不純物等 ) がわかり、プロセスの改善策を具体的に明示することができる。すなわち、発光材料、発光デバイスの最大課題である、高効率化を本質的にもたらず手段となる。

## 【 0 0 5 1 】

また、本発明の方法は、紫外、可視、赤外域の各種発光材料、蛍光体等に共通に有効であり、広い波及効果が予想される。

10

## 【 図面の簡単な説明 】

【 図 1 】 本発明にかかる 2 波長励起の模式図である。

【 図 2 】 本発明の実施例を示す時分解 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定装置 ( システム ) の構成図である。

【 図 3 】 本発明にかかる 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の働きを、水の流れに例えて説明する図である。

【 図 4 】 パルス応答 ( その 1 ) の説明図である。

【 図 5 】 パルス応答 ( その 2 ) について説明する。

【 図 6 】 図 6 は本発明の実施例を示す時分解 2 波長励起フォトルミネッセンスによる禁制帯内準位の測定方法 [ 図 1 ( b ) の 2 準位モデルの場合 ] の説明図である。

20

【 図 7 】 時定数  $\tau_1$  の A G E 強度密度依存性を示す図である。

【 図 8 】 時定数  $\tau_2$  の B G E 強度密度依存性を示す図である。

## 【 符号の説明 】

1 A G E 光源

2 B G E 光源

3 試料

4 分光器

5 光電子増倍管

6 デジタルオシロスコープ

7 ボックスカー積分器

8 コンピュータ

30

1 0 1 伝導帯 n のタンク

1 0 2 価電子帯 p のタンク

1 0 3 非発光再結合準位 1 のタンク

1 0 4 管 ( 発光再結合 )

1 0 5 , 1 0 6 管 ( 非発光再結合準位 1 )

1 0 7 , 1 0 8 , 1 1 1 ポンプ

1 0 9 非発光再結合準位 2 のタンク

1 1 0 管 ( 非発光再結合準位 2 )

2 0 1 通常の P L 部

2 0 2 2 波長励起 P L 部

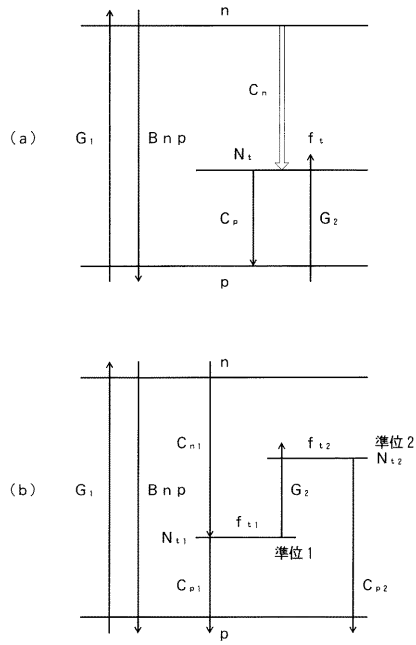
2 0 3 2 波長励起 P L の時分解応答部 (  $\tau_1$  ,  $\tau_2$  ,  $N_1$  ,  $C_p$  )

2 0 4 時定数  $\tau_2$  を用いた計算部

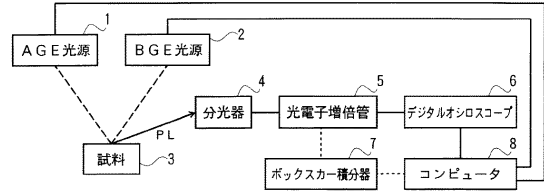
2 0 5 フィッティング部

40

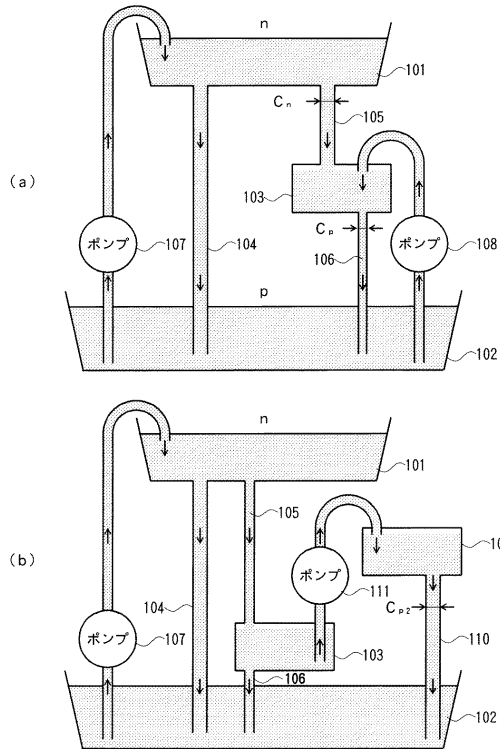
【 図 1 】



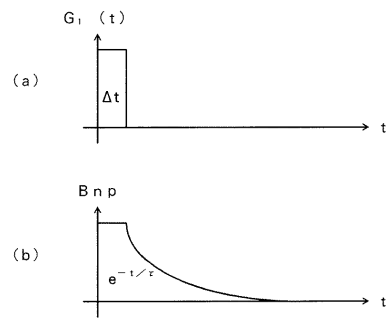
【 図 2 】



【 図 3 】

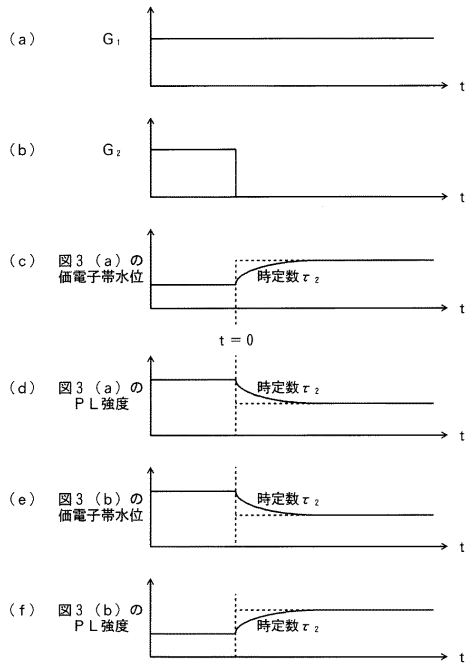


【 図 4 】

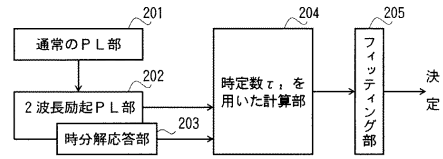




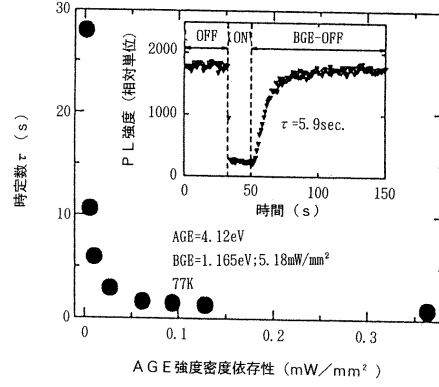
【 図 5 】



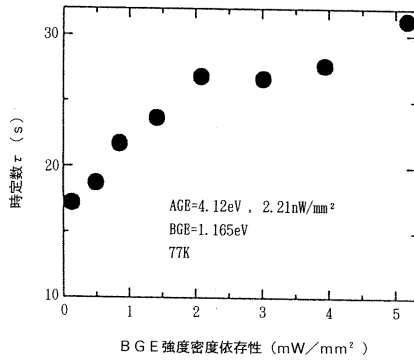
【 図 6 】



【 図 7 】



【 図 8 】



フロントページの続き

(58)調査した分野(Int.Cl. , D B 名)

G01N 21/62-21/74

H01L 21/66

JSTPlus(JDream2)